

# 大人が絵本を 第98回 イギリスに



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子\*

小児歯科医師 濱野 良彦\*\*

\* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)  
\*\* 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

## 問題です。Q 1) エリザベス女王が最後に スクリーンで共演した相手は誰でしょう？

2022年は、残虐な紛争や暴動、核威嚇が相次ぎました。自然災害、人的災害により奪われた大切ないのちに哀悼の意を表します。

英国の君主として2月に在位70年を迎えたエリザベス女王のご逝去が9月8日、報じられました。即位70周年を祝う祝賀行事「プラチナ・ジュビリー」からわずか3か月後、英国全土が悲しみに包まれたのです。

6月4日にバッキンガム宮殿で行われた祝賀コンサートの冒頭では、世界中の子どもと、かつて子どもだった大人、そして本を司ることを生業とする人々の心を一気に躍らせる映像が流れました。

それは、英児童文学『くまのパディントン』の主人公パディントンとエリザベス女王がバッキンガム宮殿でティータイムを楽しむというものです。何というお茶目でワクワクするシーンでしょう。パディントンが巻き起こす「騒動」が、この物語の人気要素でもあるのですが、エリザベス女王を前にしてもパディントンはいつもの粗相をしてしまいます。しかし、女王の返しが絶妙なユーモアに溢れていて、世界中のパディントンファンと、エリザベス女王ファン、どちらをも虜にしまいました。そして、新たなパディントンファンを生んだのです。

『くまのパディントン』  
マイケル・ボンド 作  
ベギー・フォートナム 画  
松岡享子 訳  
(福音館書店)



女王の死去を受けて、イギリス国内各地の王立公園には、その死を悼む多くの人々が供えた花やメッ

セージカードのなかにマーマレードサンドイッチが見られたため、野生生物に悪影響だから控えてという報道もありました。パディントンの大好物マーマレードサンドイッチをめぐる女王との愉快的やり取りもあったのです。

エリザベス女王、安らかにお眠りください。



## Q 2) イギリスでクマといえば誰？

イギリスで1958年に第1作目が出版された『くまのパディントン』は、日本でも1967年に松岡享子氏の翻訳で発行され、今も人気のシリーズです。2012年には木坂 涼氏の訳で絵本になり、より小さな子どもたちにも届けられるようになりました。2017年に作者であるマイケル・ボンド氏の死去が報じられた際は、全国の公共図書館で追悼コーナーが設けられました。

イギリスでクマというと、パディントンばかりではありません。大人のファン層まで幅広くもち、世界中で愛され続ける『クマのプーさん』がいます。ハチミツ好きなのんびりやのプーさんは、20世紀初頭に登場するのですが、初めて「プー」という名前でお目見えしたのは、1926年10月14日初版の『Winnie-the-Pooh』です<sup>1)</sup>。エリザベス女王が誕生したのは1926年4月21日、マイケル・ボンド氏は同年1月13日生まれですから、お二方はプーさんと同い年で、ともに激動する時代を生きてこられたのです。

日本にプーさんがやって来たのは1940年のこと、松岡氏の師匠である石井桃子氏の翻訳で岩波書店から出版されるのですが、戦時下、敵性国の文学とされ絶版になります。しかし戦後、英宝社が復刊させ、1956年には再び岩波書店の「岩波少年文庫」から石井桃子訳版が発行されたのです<sup>2)</sup>。

# 手にするときは！

## みる絵本の歴史

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

日本は戦後になって、現在の源流となる本格的な児童書が出版されるようになるのですが、当時はその大部分をアメリカ、イギリスの翻訳書が占めていましたので、『クマのプーさん』も広く受け入れられたのです。

### Q3)『クマのプーさん』の作者は？

プーさんの人気爆発は、ウォルト・ディズニーがアニメーション映画にしたことも大きく影響しています。もしかしたら平成生まれの人のなかには、『クマのプーさん』(ディズニー版はひらがなの「くま」表記)はディズニーのキャラクター認識でしかない方もいるでしょう。改めて整理しましょう。『クマのプーさん』は、イギリスの作家A.Aミルンのお話に、E.M.シェパードが絵を描いて、1926年に誕生した児童文学なのです。ディズニーアニメーションとして初めて公開されたのは、それから40年後のことです。



(岩波少年文庫)

『クマのプーさん』  
A. A. ミルン 作  
E. M. シェパード 絵  
石井桃子 訳  
(岩波書店)



『絵本 クマのプーさん』  
1968年刊

日本での絵本化はディズニーアニメより早く、1959年にフレーベル館の月刊絵本より『キンダーブック くまのぷーさん』のタイトルで発行されるのです。訳文は石井桃子氏のまま、武井武雄氏が絵を担当しました。その後、1982年に今でも改版を読むことができる「クマのプーさんえほん」シリーズの初版が、読みものと同じ岩波書店より出版され、幅広い年齢層に支持されることになるのです。

### Q4) イギリス絵本の第一次黄金時代を築いた三大画家をズバリ3人言えますか？

エリザベス女王とプーさんが生まれた時代、19世紀半ばから20世紀初頭のイギリスは、児童文学の第一次黄金期といわれ、世界的に注目されています。ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』や、J.M.バリー『ピーター・パン』などが生まれたのもこの時代です。

1860年～80年代がイギリスの絵本史で画期的な時代といわれるのは、色刷り絵本の最高峰、エドモンド・エヴァンズの活躍によります。多色刷を完成させ、印刷技術の粋を結集した大量出版の草分けとなって、当時の「お粗末で品の悪い絵本」を、よいデザインの芸術的なものにしたいと考えてウォルター・クレインを探し出した立役者なのです<sup>3)</sup>。

クレインは、安価で消耗品であった絵本を一冊の本として絵の芸術性によって繰り返し読むにたえる文化財であることを知らせ、『子どものオペラ』『子どもの花束』『子どものイソップ』の三部作で、当時の絵本観を変えるのです。

そんなときエヴァンズが出会ったのは、絵入り雑誌のさし絵画家であったランドルフ・コールドコットで、忙しくなったクレインの後継者となります。コールドコットは、風景画と人物画というイギリス芸術の伝統を新しいメディアー絵本ーに託したのです。マザーグースの『ジャックのたてた家』はコールドコットが絵を描いた有名な作品です。しかし、絵本黄金期真っ只中の1886年、39歳の若さで亡くなってしまいます。

そして、エヴァンズが父親を通して次に出会ったのが、ケイト・グリーンナウエイです。グリーンナウエイの大ベストセラー『窓の下で』は、全ページカラー刷り、破格に高額で、エヴァンズが当時の常識を破る冒



険に踏み出し、時代を拓く作品となったのです<sup>3)</sup>。

こうしてイギリス現代絵本の源流となる、新たな表現形式を確立した三大画家が誕生しました。才能のあるイラストレーターのなかから絵本作家としてふさわしい人材を発掘し、画家の個性を引き出したエヴァンズこそイギリス絵本界の功労者といえます。

### Q5)イギリス生まれのウサギの名前は？

イギリス生まれの動物のキャラクターには、クマと同様に長く愛されているウサギがいます。もうおわかりでしょう。今年2022年に120周年を迎えた「ピーターラビット」です。1902年に原書初版が商業出版された古典絵本の中の伝統的名作は、時代を超えてもまったく色褪せず、日本では120周年を記念した今年、川上未映子氏の新訳版が早川書房から出版されたのです。

日本で、正式に著作権を得て出版されたのは1971年です。石井桃子氏の翻訳で福音館書店より『ピーターラビットのおはなし』など3作品が出版された、シリーズ24巻がこれまで国内の定本とされてきました<sup>4)</sup>。

芥川賞作家の川上氏は、「ポターの書いた原文は、その時点から変わることはありません。でも、翻訳はその時代を生きている人のことばになります。私のことばで文章を選んでいくことになるので、そういう意味では、ことばってというのは生きてるんだと思います」と、翻訳という仕事に取り組む意味を説明しています<sup>5)</sup>。令和世代の生きたことばを紡ぐということでしょうか。私には、石井桃子氏のことばが今もイキイキと生き続けているところです。

『ピーターラビットのおはなし』  
ビアトリクス・ポター 作・絵  
石井桃子 訳  
(福音館書店)



ピーターラビットシリーズは、作者のビアトリクス・ポターが家庭教師の息子に送った「絵手紙」から

誕生した物語です。この絵手紙を元にして、お話と絵をポリッシュして一冊の絵本にまとめ、それを1901年12月に自費出版したのです。それは、口絵1枚だけが彩色画で、他の絵は無彩色の線描画でしたが、それを見たロンドンのフレデリック・ウォーン社がすべて彩色画にして商業版として出版したいと申し出たことで、「ミニチュア絵本の宝石」と評される、あの小さな美しい絵本が生まれたのです<sup>6)</sup>。

エリザベス女王が誕生したときには、すでに存在していたこの「ミニチュア絵本の宝石」を、女王は原書で楽しんだことでしょう。

### Q6)レズリー・ブルックの『金のがちょうのほん』に収録されているのは何話？

イギリス絵本の第一次黄金期は、挿絵とは違った「絵本」というメディアとして成立するときでもあり、この流れに大きく貢献したのは2人の作家です。

先駆者の1人はウィリアム・ニコルソンで、印刷技術革新で時代遅れになってきた木版を使って『ABCの本』などを出版しました。これにはチャックブックから続くフォークアートを継承するという意味があり、画家が新しいメディアとして絵本をアートとして認識することにつながるのです<sup>7)</sup>。W.ニコルソンは、現在も版を重ねている『かしこいビル』(ペンギン社)や、『ふたごのかいぞく』(復刊ドットコム)の作者です。

もう1人は、こちらも版を重ねている『金のがちょうのほん』(福音館書店)の作者であるレズリー・ブルックです。「金のがちょう」「三びきのくま」「三びきのこぶた」「親ゆびトム」の4編が収録されている昔話絵本について、三宅興子氏は「いずれも動物の表情や擬人化に優れ、ユーモアのある温かい絵で、読者には細部の発見を用意するなど、絵と文の関係が対等で絵本らしい絵本になっている」と解説しています<sup>7)</sup>。ピーターラビットと同じく、イギリスで20世紀初頭に発行された絵本が、100年以上の時を超え、言語に関係なく世界中の子どもたちと、その保



護者にも楽しまれているのです。



## Q7) 英国の絵本第二次黄金時代はいつ？

イギリスの絵本史においては、クレイン、コールデコット、グリーンハウエイらが活躍した19世紀後半の時代を絵本の第一次黄金時代というのに対し、1960～80年代を第二次黄金時代といいます。

戦後、数年を経て、教育の振興はイギリスにとっても大きな目標の一つであり、教育界は児童文学を真剣に取り上げるようになりました。また、児童文学の批評なども盛んに行われ、絵本の批評には児童文学の知識のみならず、視覚芸術の専門的知識も必要であることが認識されるようになったのです。

第二次黄金時代に先行して、1955年には英国図書館協会によってケイト・グリーンハウエイ賞が創設され、絵本作品に賞が与えられるようになって以来、絵本に対する一般の意識が変わり、絵本の制作、出版に勢いがついたので。さらには、ヨーロッパの他の国の絵本が英語に翻訳され出版されるようになり、結果として子どもの絵本への関心が高まり、作品の質も向上して、イギリスの絵本界は大きな可能性をもつ分野として確立されていくのです<sup>7)</sup>。

1960年代に、地位を確立した作家がたくさんいるなかで、チャールズ・キーピングはこの時代のもっとも力のある画家といわれました。描写力に優れているけれど、子どもの好みに迎合するする芸術家ではなかったため、問題視されることもあったとも記録されています<sup>7)</sup>。

また、「色彩の魔術師」と言われたブライアン・ワイルドスマスは、多色刷りの水彩画を特徴として、彩り豊かな絵本を多数発表しました。最初に出版された『ワイルドスマスのABC』で、ケイト・グリーンハウエイ賞を受賞したのです。



## Q8) 21世紀に英国から来た絵本運動とは？

21世紀のイギリス絵本界の動向も忘れてはなりま

せん。1992年から試験的に行われたブックスタートが、2000年に国をあげての運動となり、読書と保育の支援活動として成功を取めたのもイギリスです。

イギリスに倣ってわが国でも2001年に導入してから、21年が経過した現在では、全国1,741市町村のうち1,097の自治体が導入しています。開始15年目の6年前では901自治体でした。この数字からも、ビブリオキッズの日常からも、そして街中の書店で目にする光景からも、赤ちゃんと絵本を読みあう親子の姿が20年前と比べて広がっているとみて取れるのです。

200年近く前から今日まで、イギリス絵本の先駆者たちが開拓してきた技術や研究成果は、世界の絵本文化に影響を与えています。日本でも、児童書出版業界はもとより、パディントンやプーさん、ピーターラビット、機関車トーマス、メイシーちゃん、くまさんのおしごとシリーズ(福音館)、「チャーリーとローラのものごと」(フレーベル館)などなど、あげればきりがなほどのイギリス絵本に、夢と希望と生きる力、それに楽しい時間をもらって、親子が成長してきたのです。

これらイギリス絵本は、100年後の日本でも愛されていることでしょう。100年後の絵本文化の充実を構築していくのは、今を生きる大人の役目に他なりません。



## 文献

- 1) 安達まみ：くまのプーさん 英国文学の想像力(光文社新書), 光文社, 東京, p.3-10, 4-132-138, 2002.
- 2) 白泉社：今だから会いたい クマのプーさん, MOE 41(3), pp.6-35, 2019.
- 3) 三宅興子：イギリス絵本論, 翰林書房, 東京, p.15-19, 1994.
- 4) 河野芳英：ピーターラビットの世界へーピアトリクス・ポターのすべて, 河出書房新社, 東京, p.100-107, 2016.
- 5) NHK 科学文化部：“新たなピーターラビットを” 芥川賞作家 川上未映子の挑戦, NHKWEB 2022/3/30, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220330/k10013555041000.html>
- 6) 吉田新一：イギリスの絵本(上) 伝統を築いた作家たち, 朝倉書店, 東京, p.99-105, 2018.
- 7) 三宅興子 他：イギリスの絵本, 絵本の事典, 朝倉書店, 東京, p.36-67, 2021.